

～善きサマリア人のようにするには？～

もし、自分の目の前でお金を盗るような犯罪行為を見た場合、きちんと対処できますか？それとも見て見ぬふりをしますか？今の日本では、自分が犯罪に巻き込まれたくない故に、きちんと対処しないで見て見ぬふりをする人が多いそうです。どうして、この様に見て見ぬふりが出来るのかと言うと「自分は関係ない」と思っているからです。悪いことをしているのは、その人であって自分ではないから関係ないと思っているのです。でも聖書では「愛は結びの帯として完全なものです（コロサイ3：14）」と書いてあります。しかし私たちが他人を愛せなくなっているのは無関心だからです。マザー・テレサも「愛の反対が無関心だ」と言っています。他人を憎む・自分だけでいい・他人は関係ないと思う心の表れが無関心なのです。この無関心が無視につながるのです。この無関心・無視によって、防げたかもしれない犯罪などの悪いことが起こってしまうかもしれません。聖書には「わたしが悪者に、『あなたは必ず死ぬ』と言うとき、もしあなたが彼に警告を与えず、悪者に悪の道から離れて生きのびるように語って、警告しないなら、その悪者は自分の不義のために死ぬ。そして、わたしは彼の血の責任をあなたに問う（エゼキエル3：18）」と書かれています。私たちは自分のためではなく他人を愛する故に生きていかななくてはなりません。パウロも「もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです（ガラテヤ2：20）」と言っています。このイエスさまのために生きるというのは、相手・他人のことを愛し、その人がもしも間違っているのなら、その人に関わり、罪の道から元に戻してあげることです。神さまから愛されたのでこの愛を他人に流してあげなければいけません。ルカ10：25～37に善きサマリア人のたとえ話があります。あるユダヤ人がエルサレムからエリコに向かう道中で、強盗に襲われて身ぐるみはがれ、半死半生となって道端に倒れていました。祭司、レビ人といった神殿にかかわる人々はこの人を助けずに通り過ぎました。しかしユダヤ人から大変に嫌悪されていたサマリア人は、この半死半生の人を助けたのです。傷口の治療をし、家畜に乗せて宿屋まで運び、宿屋に怪我人の世話を頼んで費用まで出した、と言うお話です。ユダヤ人の律法学者が同じくユダヤ人であるイエスさまに永遠の生命のために何をすべきかを問いかけた際、イエスが逆に律法にはどうあるかと尋ね返した場面です。そして、イエスさまを畏にはめようとした律法学者に逆に。「『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」答えさせました。この問答の後に出て来るのが先ほどの善きサマリア人のたとえ話です。またこの後すぐ（ルカ10：38～42）にマルタとマリヤの話もあります。イエスさまをお招きした時の話です。マリヤもマルタも自分にとって一番必要なことを行っていました。しかしここでマルタは自分の行動とマリヤの行動を比較して裁いてしまいました。その愛の無い行為について良くないと語られているのです。自分たちの価値観・思いでない神さまの思いに立って神さまの御言葉に立って行動しなければいけません。「信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです（ローマ10：17）」これが全てです。ですから①**イエスさまの御元へ…御言葉に聴く！！**ようにしましょう。何の力もない私たちが自分の価値観やルールでやっても上手くいくはずがありません。だから神さまの元へ行って聴きましょう。目的をしっかりと見定めて焦らずに行動しましょう。この見定める方法が聖書に書いてあるのです。聖書に書いてある御言葉が私たちの案内書です。自分は自分のことが分かりません。だから私たちは神さまに聞かなくてははいけません。（Iペテロ2：1～4）主の元に来なさい、御言葉の乳を慕い求めなさいと書かれています。私たちは神さまの前に出れば変わります。変わればすべての悪意、すべてのごまかし、いろいろな偽善やねたみ、すべての悪口を捨てる事が出来ます。だからイエスさまの御元へ行って愛をもらいましょう。安らぎを得ましょう。そして②**心の内にキリストをおきましょう**。心にあるものが口から出たり顔に表れたりするのです。自分の心が「自分」なら、それは自己中心です。隣人を思い愛を流すと、その隣人がまた次の隣人に愛を流すようになるのです。「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです（ガラテヤ2：20）」と書かれています。隣人は自分の一番憎い人であることが多いです。でも、この隣人を愛せないとい他の誰も愛することが出来ません。その人を愛することが神さまを愛することだと聖書に書いてあります。（Iヨハネ4：15・16）だから憎くて愛せない時、「イエスさま！愛します」と言うのです。そうすると、告白したので心の中心がイエスさまになります。自分中心ではなくなるのです。そして③**WWJDです**。これは「What Would Jesus Do?」の略で、「もしジーザス・神さまだったら(こんな時)どうするだろう?」という意味です。聖書にはイエスさまの生涯が書かれています。そしてイエスさまは、私たちがどう生きればよいのかを教えてください。だから、聖書を読む必要があります。4つの福音書にはイエスさまの生きてきたことが書かれています。福音書以降にはイエスさまと一緒に歩んだ人々がイエスさまから受けたもの、感じたことを書き記しています。どうやってイエスさまが罪を購ったのか、苦しみと闘ったのかなどが書かれていて教えられます。（Iヨハネ2：5・6）イエスさまはひとりひとりに接して、その人が変えられることに徹しました。その人のことを愛し、その人の重荷を負いました。私たちがしなければいけないことは、今私たちの隣で困っている人々にイエスさまの愛を携えてイエスさまがしたようにその人の重荷を負って、それを十字架にかけなければいけません。人には出来ないことでも神には出来ます。だから神さまを信じている私たちも、どんなことでも出来るのです。それを信じている私たちは強いです！（要約者：行司 佳世）